



思考する集団

保育園でも、対外的な会議がオンラインに切り替わっていったことなどを、以前のひぐらしでも触れたのですが、いわゆる「研修」というやつもその例外ではありませんでした。

一般的な製造業や商業的サービスとは少し違って、保育の世界は、保育者自身の習熟や変容が、「品質向上」そのものの。日々の経験に、外から新しい知見を加えながら、己の保育の捉え方を、再構成し続けていくことがその仕事です。なので、この研修の形がオンラインになっていったことも、私たちの仕事のスタイルを大きく変えたことでした。

そうしたあるオンライン研修の画面に、2枚の写真が映し出されたことがあります。1枚の写真には、満面の笑みを湛え、少しおどけた様子で体を躍らせる3歳児が。もう一枚には、何かに思いを馳せるように、凜とした表情で、遠くを見つめる5歳児が写っていました。

前者は、湧き上がる探究心に任せ、マイペースに生きる3歳児を。後者は、明日を見据えながら生きる5歳児を。それぞれの年齢を象徴するポートレートとして紹介されました。

そして、このわずか2年の間の劇的な変化の裏側で、一体何が起きて(育って)いるのか…というのがこの日のテーマでした。その背景にある育ちは、

- ・論理的思考力(因果関係の理解)
- ・他者の心を読み取る力(個性形成)
- ・言葉、ストーリー理解の飛躍

とこのことなのですが、そんな小難しい理屈はさておき、要はこの3〜5歳の間に、「言葉巧み」になって、「理屈っぽく」なって、「相手の気持ち」がわかるようになって…つまり、だんだんと、「もの」がわかる連中」に見えてくるのです。

心赴くままにブラブラと園内の徘徊していた3歳が、やがて何かを目指し協働する5歳となる…ならば、その間にある4歳の頃は、どう過ごせばよいのか…それは、「考え合う」生活だと言うのです。かしこくなっていく頭を、ふんだんに使って鍛えていく生活。しかもそれを、

えてみる」と言ったMちゃんを支えたかったと振り返っています。そして、その記録は、次のように結ばれていました。

今回、Mちゃんがたどり着いた答えが、本当の意味で正しかったのかはわかりません。しかし、年中児のMちゃんが『納得できる答え』だったのではないかと思っています。

そして、小学生、中学生へと成長していった時、「あの時はそう思ったけれど、もっと別の答えがあるかもしれない。」と思ひ、また自分で考えて、新たな答えを導き出していく。それを繰り返していくのだから、そうであって欲しいなと思っっています。

園長 折井誠司

仲間と一緒にやるといのがミソ。例えば、日頃、それぞれがぶつかる些細な問題に、思いを交わしながら、その解決を考え合ってみたり…そんな思考の応酬を経験したい。「話ながら思考し、思考しながら話す」のが幼児期の特徴なのです。「仲間と一緒に思考する集団」…何かカッコいい。それが写真にあった、あの凜とした5歳児の表情に繋がっていくと言っています。

ただ、この「年齢」というのは、「発達の順番」を表す大雑把な指標に過ぎません。そうした育ちが、どのタイミングで訪れるのかは、人それぞれであることも、忘れてはいけないことです。

さて、こうした話を聴きながら、私は園内で書かれた、「野菜はいつ育つ?」と題されたある4歳児の保育記録を思い出していました。その概要は…

園庭の野菜育てに夢中なMちゃん。ある日、朝と夕の水遣りではあまり伸びていない枝葉が、翌朝になると大きく育っていることに気づくのです。

見間違いかと言いながら、保育者と一緒に前後の写真撮影。やはり夜を越した時に大きくなっていることを確認すると、「正解!」と喜びながらも、「でも、昼に太陽を浴びるのに、どうして夜?」。次なる疑問に、保育者が返答に窮している…「私、考えてみる!」…こうして、Mちゃんの答え探しが始まったのです。そして、図鑑を開いたりしながら、「夜の空気に栄養があるのか」「月の光で大きくなるのか」などと推論を進めていったのでした。

そして、それはある日の午睡時、Mちゃんと保育者が、言葉を交わした時のこと。「なんで寝るの?」

「大きくなるためだよ」

すると翌朝、保育者を見つけた彼女は、開口一番、

「わかつちゃった!野菜も昼にたくさん食べて、寝てる時に大きくなるんだね。」

この記録を書いた保育者は、端末を叩けば、何でも答えが出てくるこの便利な世の中に疑問を感じながら、「自分で考

- 編集 誠美保育園
- 発行人 折井誠司
- 印刷所 誠美保育園
- 発行所 誠美保育園

社会福祉法人 誠美福祉会
〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2
電話 042-6975-1551
ファックス 042-677-5664
E-mail sebi@nokken.jp
http://nokken.jp/